

たが、効果ははっきりとわからなかった。しかしながら、頸部クーリング・アイスボールについては爽快感が得られたという結果であった。

大山らは放射線性口内炎に対し口腔内の適度な冷却は疼痛の緩和効果をもたらすと同時に唾液分泌を促進し、口腔内を清浄化することにより感染の防止、炎症などの効果をもたらす得ると予測される¹⁾と述べている。小野らはエレースアイスボールの効果についての研究において、含嗽に比べアイスボールにしたことで口腔内にとどまる時間が長くなりエレースの効果である壊死組織の除去、治癒促進等の助長に加え、冷却効果による粘膜血管の収縮により炎症を押しさえることが出来た²⁾と述べている。また、口内炎発症の苦痛を軽減するために、エレースアイスボールによる含嗽を行い、従来の含嗽法に比べ口内炎の発症、進行を遅延させ、口内炎の重症化を有意に軽減することができた²⁾とも述べている。

当病棟においては、現在、エレースの使用法としては含嗽のみとなっているが、患者自身もはっきりとしたエレースの効果を実感しておらず、看護師も評価できていないのが現状である。今後は、エレース

アイスボールの使用も含め、検討していく必要があると思われた。

食事については、痛みの程度にあわせ、食への楽しみが持てるような食事内容や形態などを考慮し、栄養課とさらに連携をとっていく必要があると思われた。

IV. おわりに

放射線療法の副作用の出現時期や程度は異なるが、口内炎や嚥下時痛が最も患者にとって苦痛であることが明らかになり、現在行われている看護を見直すよい機会となった。今後は他職種との連携を図りエレースアイスボールの使用の検討を含め改善に努めていきたいと思う。

文 献

- 1) 大山和一郎, 海老原敏:放射線性口内炎に対する ice-ball cryotherapy の試み. 癌の臨 1996;42:161-4.
- 2) 小野幸加, 阿久津みち, 白土三枝:エレースアイスボールによる放射線性口内炎の軽減効果. 茨城病医誌 1996;21:164-4.

児の個性を大切にする育児への援助

—入院中における品胎褥婦への関わりを通して—

6-1病棟 鈴木 恵美 渡邊 幸子

I. はじめに

多胎育児において母親は疲労が強く、時間的余裕のない中で育児に追われている事が明らかになっている。多胎児は低出生体重で出生する事が多く、小児科や Neonate Intensive Care Unit (NICU) へ搬送になり、児の退院は母より後になるケースがほとんどである。これまで多胎の妊娠褥婦への看護を行ってきたが、入院中は妊娠期の切迫早産への関わり、産後は母体側のケアが主であった。その為、実際の育児に携わることがなく母親は退院し、その後の育児に関する不安に対し看護が十分とは言えなかった。今回品胎褥婦で産後の入院期間が通常より長く、他院 NICU から退院し当院産科病棟に3子全員がそろい、入院中に育児支援が必要とされた事例に遭遇したため報告する。

II. 研究の目的

多胎育児において育児技術習得に伴う母親の気持

ちの変化を明らかにし、各児の個性を大切にしていくための育児支援について明らかにする。

III. 研究方法

40歳代前半の品胎褥婦(T氏)を対象とし事例検討研究を行った。産後3子全員が他院NICUを退院し、当院産科病棟にそろった日から、本人と3子全員が退院するまでの37日間を調査期間とした。

IV. 結 果

T氏は、はじめ育児に対して積極的な様子ではなく、育児に慣れるのは退院後でよいと考えていた。初期の育児姿勢に最も大きく影響を与えたものは疲労であった。また1人ずつゆっくり関われない事や効率性を重視する育児に対し罪悪感があった。1子ずつと大切にに関わりたい、知りたい希望があったため本人と相談し、評価し1週間ごとにお世話のスケジュールを作成した。身体の回復、気持ちの変化に合わせ、育児の時間を延ばし、同時にお世話する児

の人数を増やした。今まで1子ずつ別に記入していた育児記録を3人同時に書き込める用紙を作成し、3子の育児を行っている時でも1人1人の個性に気付く事が出来るようになっていった。

V. 考 察

1. 育児意欲を高め、各児に愛情を平等に注ぐにはまず母親の疲労軽減が必要である。
2. 看護師は母親の疲労度を考えながら育児をすすめていき、いつでも休んでよい事、困った時には力

になるという安心感を与えていく必要がある。

3. 3子同時に行う、効率性を重視する育児は、時に母親に罪悪感を抱かせる可能性があるため、思いを傾聴し、母親の希望をケアに反映していく事が必要である。
4. 3つ子であっても一人一人と向き合う時間が必要であり、3人同時にお世話する時も、一人一人の個性を大切にしていると感じられるような工夫が必要である。

救命救急センター病棟のキャリアスタッフ教育プログラムの改善

救命救急センター病棟 漆 畑 真 織 長 島 美 香
村 松 美 代 子 太 田 亜 希 子
横 野 靖 代 牧 野 仁 美

I. はじめに

当病棟は一般病棟で数年の勤務経験をしたナースが異動対象となっており、私達スタッフ教育係は経験を考慮のうえ交替時から1年間でCCU看護以外の業務全般に携われるように教育プログラムを組んできた。しかし看護体制や医療内容の変化に合わせて更なる効果的な教育プログラムを考えることが必須となり、これまでの教育プログラムを見直す為アンケートを実施、検討改善をしていくことができたため報告する。

II. 研究目的

より効果的な教育プログラムへの改善

III. 研究方法

当病棟に勤務する看護師29名、勤務1年以内1年以上で指導を受ける側指導をする側と分けアンケートを実施、得られた回答を研究者間で検討要約した。

IV. 考 察

レポートに関して、勤務交替者からは役立った、基盤となり良かった等肯定的意見が得られた。勤務交替当初は様々な環境の変化に対応していかなければならない。うまく病棟に適應し以前の看護能力を早期に取り戻す為には、必要な知識や技術の獲得が必要となる。一方、指導者は内容の見直しの必要性や実際の看護場面で生かしていく事の難しさを感じていた。そこで内容を当病棟で受け持つ事の多い疾患など現状にあったものを選択整理し、実際の看護場面での知識や思考過程が見えるように具体的な疾患と必要な知識項目を示した疾患レポートと、事例

を示しアセスメントしていく事例レポートを追加した。

技術チェックリストに関して、指導者から実践的なチェックや質問形式が良いとの意見があり、レポート同様実際の場面で活用できるようにしたいと考えていることがわかった。そこでチェックの方法を口頭のみ確認ではなく実際に行動をとる方法に変更した。

指導方法・関わり方に関して、指導者からプリセプターや教育係などの一部のスタッフが指導に関わるのではなく病棟スタッフが皆でコミュニケーションよく勤務交替者に関わり、指導をしていきたいという思いが感じられた。そこでミニ講義は指導者が誰でも講義を行える事とし、病棟全体で関わる事を意識付けるようにした。さらに教育スケジュールの予定を一覧にして提示する事にした。また、指導ポイントについては統一したものを新たに作る事とし、現在検討・作成をしている。

V. 結 論

- i. 課題レポート・チェックリストの内容・実施期間・確認方法を実践に沿ったものとする。
- ii. 教育スケジュールの提示とプリセプターのサポートを含めた病棟全体で関わる指導体制をとる。

VI. おわりに

本研究により教育プログラムの改善点を明らかにし変更することができた。今後も病棟の状況にあわせスタッフの意見やプログラムの効果を確認しながら未解決な点の検討・改善をすすめていきたい。